

或る日（小説）

著者	池田, 小一郎
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 7 1
ページ	2 - 2 5
発行年	1919-06-20
URL	http://hdl.handle.net/2298/6493

或る日

池田 小一郎

「かうしよう？」

「ちうねね……」

「困つちもうなあ。」

「……………」

門司行の列車から、鳥栖のプラットホームに吐き出された二人が、二等待合室に交はした最初の會話はかうであつた。Kは不満さうに、兩足を一尺程もはたいだ真中に、大きな櫻の棒を突き立てた。その途端、床の瀝青はコンと音がした。ベンチは七分通り塞つてゐた。玄人めいた女が膝掛の上に、鬚のない若いセルのマントに甘つたるい媚び笑ひをしてゐる。博多帯と印臺の指輪と高い頬骨を持つた四十男が、小型な馬皮のトランクの上で、側の書類と見較べながら、考へ考へ、幾枚もの頼信紙に金ペンを走らせてゐる。株屋か相場師かだらう。外の人々は、大抵、手持無沙汰にしてゐる。Kはじれつたさうに兩蓋の銀側を見た。六時半を一寸廻つてゐる。

「抑も、幾時出るんだい。」

Kの聲は意外に太かつた。沈滞せる待合室の空氣は時ならぬ振動を起した。あの女がギョツと鬚の下から斜に視線を投げた。土耳其帽の老紳士は、「羽衣」の調子をとつてゐた扇をハタと止めた。福日を拾ひ讀みして

ゐた肉の感じのいゝ男は、いぶかしげに眼鏡を上げた。Kの左脇にT子のはにかんだ聲で囁く。

「八時二十三分に出るんぢやなくつて？」

「ぢや、もう二時間かな。あんな變挺子な汽車に乗るからだよ。」

T子は男の心を掬みかねて、氣の毒さうに見上げる。

「かうする。」

かう言はれると彼女は益々黙つてしまふ。頑丈なニス塗りのドアに靜かに身を寄せて、ジツと自分の足の爪先を見入る。——今朝になつてあはたゞしく下駄屋を呼んで買つた此の下駄、土を踏まぬから塵さへ着いてゐない。それも反つて變な氣がする。あゝどうするんでせう。私は男の方かたも旅行するのは、はじめたわ。まして、兄さんとは全くはじめなんですもの。一寸も勝手がわからないわ。それに兄さんは怒つてゐらつしやるし、外の人の注意は私達二人に集まつてる様子だし。どうしたらいゝのかしら。——無意識にバラッルを弄んでゐた彼女は、紅まのハンカチを眞珠の齒にくはわて、軽く之をしがいた。——男の方かたは人中でも臆するような事は少ないでせうけど、女の身は、そして私みたような内氣者は……ほんとに、こんな時にどうしていゝ事やら迷つちまうわよ。一層の事來ねばよかつたのね。せめて、おばあちゃんでも一緒だつたらごんなにいでせう。——T子は、愚痴つぽくなつて、眼球の底には、淡い水氣が湧き出るのを覺れた。

「Tちゃん。此處出よう。」

男の聲に驚かされて彼女は「アラ、びつくり！」とも言ひ得ずに鈴のように目を見張つた。Kはさつさと室を出ようとする。T子はテーブルの上の荷物を氣にしながら、

「兄さん。荷物はどうして？」

「ウム、持つておいで。」

T子は、明るい小豆色の地に水色の轡くつわを刺繍したバラソルと、市松模様のオペラバックと、焦茶色の絹風呂敷の包を手にする。雑沓ひだまりを抜けて二人は停車場の玄關に立つた。空は暗い、雨になりそうだ。

「ここに？」

「もう七時だよ、食事を取らう。」

「私、一寸もお腹なかがすかないの。何だか胸につかへたようだよ。」

「でも、食くべなきや體からだに毒どくだ。」

「そんなら、おすしでも買ひませう。ね、あたし、おすし大好きなのよ。」

「それもいゝけど、人中では、食べる氣はしないな、食堂もないもの。」

「さうだね。」

「そして、こゝにばかり居たつて、退屈するだけよ。出てみようや、そのあたり。」

所作なびな三等客の數人は、出て行く二人の後姿を眺めてゐた。ステーション前の竹屋とかいふ家うちに行く。Kが「御免」と怒鳴る。T子はソハハくする。

「いらつしやいませ。」

「食事として戴けますか。」

「はい。直ぐ出來まして御座います。」

帳場とも思はれる邊から、「お玉ごん、六番へ御案内。」と水氣のない聲がする。Kはスリッパを引掛けて、傾斜のいゝ階段を登る。女中は「どうぞこちらへ」と先にたつ。T子はおくれ勝ちについて来る。小さい置床のついた、六疊の間。Kは大儀さうに、女中の差し出す^{つじま}座蒲團を敷き、後の壁に押しかかる。女中は「お泊り様で御座いますか。」と手をつく。

「いゝね、御飯だけなんです。そしてお手軽でいゝんだから。」

女中は下つた。T子は静かに手を組んでゐる。二人の目が鉢合せになると、ニツと笑ひがこぼれた。彼女は軽いそして美しい疲労を見せて、首を少し左にかしげる。Kは目敏く^{さき}部屋を見廻はしてゐた。

「この家は仲々權謀術數がうまいせ。」

「どうかした事があるの？」

「Tちゃんなんぞなら直ぐやられつちまふなあ。」

「オヤ、何でせう。」

「ね、よくお客を汽車に遅らすんだ。この前だつて僕殆んど^ま間にあはなかつたよ。やつと駆けつけたのさ。」

「兄さんだつてそんな呑氣な事あるの。神經質だつて言ふ癖に。」

「ハハ……、呑氣屋さんが言つてらあ。返待つの電報二本打つても端書位で済まさうとするんだものな。こちの身になつちや、たまりつこないよ。」

「まあひどい。私、呑氣屋さんだつて？、ホホ……でも、あの電報にはどう返電していゝやら、全く途方に暮れてしまつたんだわ。」

「没常識だね、電報には電報で返事するんだよ。」

「何とでも仰しやいな。……あんな峻しい事言つてさんさん人を困らして置きながら、いゝわ。」

女中が火を繼ぎに来る。

「僕達、煙草吸はないんだ。こんな温いのに反つて迷惑だ。それより早く腹の虫に安心させてくれ給へ。」

「オッホ、御戯談を仰しやいます事。」

女中はお茶をいれて出る。近くの部屋で大きな手を叩いてゐる。「湯はまだすかないか。」と官吏らしい聲もする。二人は二人の話に返る。

「こんな嫌らしい汽車はもう眞平だ。上熊本に着くな、十時五十七分だ。」Kは旅行案内を繰つて言ふ。

「宿に着くな、どうで十一時半。寢就くな、十二時にも一時にもならあ。」

「だつて仕方がないわ、是非今日の中に行かうと兄さんから言ふんだもの。」

「でもね、今日になつて、帯をこさへたり、下駄を買つたりする呑氣さは格別だ。もう一列車早いと、餘程都合よく行つたのに。」

「だつて兄さん。女は男の方のようにばかりはいかないわ。そしてお父さんが許したのも、お午おほでしたわ。」

「小父おぢさんもひどいよ。僕自身迎へにさへ行つてるのに、『世間の手前があるから、世間体が悪いから。そして他人ひとはひがんで物を見たがるものだからなあ。』など言つて、どうしても聴かないんだもの。」

「然しね、お父さん後では笑つてたのよ。そしてね。兄さんにいゝ指輪でも買つてもらひなさい。など言ふのよ。」

「あの時僕はやつ、氣にあせつて願つてゐたらう。所がTちゃんはどうだい。知らん顔の半兵衛でさ。」

「いはいわ、嘘よ嘘よ。わたし、母ちゃんにそりやせびつたわ、随分。」

「小母さんにだけね。小父さんには何とも言ひきれないんだ、Tちゃんは……それはさうと、御飯は？」

Kは呼鈴を探すが見當らない。手を鳴らす。返事がない。二度目に「ハイ。」と答へる。

「まあよく鳴るのね、耳が痛い程。」

Kは大きな笑窪を見せる。板の間に衣ずれがして唐紙がスツと明く。

「何か御用でいらつしやいますか。」

Kの顔の笑は直ちに消れて、サツと不満の色がさす。

「何かつて。どうしたんです食事は。」

「はい、ぢきに差上げます。」

Kは、立ちながら唐紙を閉ぢる女中の無作法を、いまいましさに睨んでゐた。

「氣がきかないんだ事。」T子は半ば男をなだめ顔に言ふ。

「氣がきかないんぢやないのだ。汽車に遅らして泊らさうとするんだ。」

「まさか。」

「はら時計は大分廻つてゐる。」

輪島塗の猫足が二つ運ばれて又十分も過ぎた。

「それ御覽。お櫃がない。」

「すぐ持つて来るんでせう。」

「駄目だ。下りて持つておいで。」

「呼んだらいいわ。」

「駄目さ、『何か御用で』なぞ言つて来るだけさ。阿呆らしい。」

「わたし嫌よう。」

T子は廊下に出た。まだ襖の外に立つて女中を待つてゐる。Kは隙間にチラつく彼女の着物で、それとわかる。

「Tちゃん何してる。早く行つたらいいぢやないか。今度の汽車は最終なんだせ。」

彼女は人の多い下に行くのをまだためらつてゐる。Kはガミ／＼言ふ。やつと通りかゝりの女中に之を告げる。「お玉さん、六番さんお櫃ないつてよう。」と笑聲で言ふ。それから御飯が来た。女中が何やら口上手に詫をしてもKは、てんで相手にしなかつた。結び鱧の吸物をサイダーでもあるようにグーツと飲んだ。T子は流石に氣毒がつて箸も採らない。

「婢さんいゝんですの。」

「ほんどうにお氣毒様で。」と女中は年には派手過ぎるモスの襟を合はせる。

「外にお立ちの御客様が御座いましたので、遂、おそそう致しまして。」

「いゝね。下りて頂戴。おいそがしいでせうから、ほんとう。」

「有難う御座います。濟みましたので御座います。」とも言はぬまに、Kは「さうだよ。」と唸つた。女中は暫

し二人の顔を四分六分に見較べてゐたが、居たまれずなつたのか、「それでは、誠に濟みませんけれど、失禮さして戴きます。」と下つた。T子はつゝましやかに焼鯛の背をつゝいてゐたのみで、好きな十六寸にも鯛の刺身にも手をつけやうとはしなかつた。そして、お茶をついで一つの茶碗はKの前に据ゑ、一つをさも疲れた人のようにチビ／＼飲んでゐた。Kは彼女の少食にあきれて洋食を食ひさしながら「もふい／＼」と尋ねた。T子は「今日は私、お腹一杯なの。」かう言つてお茶碗ばかりかゝゐてゐた。Kは今のT子の言葉をホークを持ちながら色々變化させて見た。「今日は私、兄さんの愛で一杯なの。だから何にもいけないの。又欲しくもないわ。私兄さんの愛だけで充分生きて行ける氣がしてよ。」「今日は兄さんに、ほんとうに聽いて戴く事があるの。それを始終考へてるの。それで私のお腹一杯よ。それはね、あの、ね。言はうかしら。……言つてもいゝ？怒らない事？……嫌だわ、何故つて言へないんだもの。——あゝそんなら思ひ切り言はうねわ。わたしね、兄さん東京ね、行つたらね、直ぐ呼んで欲しいのよ。」Kはこの時、横隔膜の下あたり、何やらホク／＼發酵する一種の熱を感じた。そして體が急に軽く宙に浮んでるような氣がした。

列車が二十分延着して二人が竝んで席を取つた時には、殆んど同時にホツと溜息が漏れた。汽車は動く。「やつとこれで安心よ。」

男はT子に大きな瞬で答へる。程なく心機を轉換されたT子は象牙のような而かもなやかな指つきで、ハシカチに褶をどつたり伸べたり、長くや三角に折つたりして、誠に心から楽しく思はれた。そして語と語とを小さく句切りながら、近く過ぎた學校生活やら友達の性格やらを、恰るで十二三の子のような表情で語り

續けた。二人は事柄に意外な符合や初耳がある毎に眉を上げて興がった。遂にKは、ピアノはどうだ、どんな割烹だ、絞り染は習つたか、琴は忘れたらうなど相手が當惑する迄に聽きたがつた。然し當惑があつてもその次の瞬間には吃度、笑があつた。笑はすぐ話の糸口を齎した。かうして會話の友禪は長く長く織り續けられた。

Kは廣く開いた兩膝の上に節の太い拳を安めて、靜かに首を左右に廻はした。左にはT子の肩越しに山高帽の西洋人が見ねる。瘠型で几帳面だ。まづ宣教師としか思はれない。その向ひあひに船成金か炭坑主といふ格の太つ腹が、旅館のレッテルをベタ／＼貼つた鞆を二つまでも抱き込んでゐる。馬鈴薯のように節目のたぬ中指と人差との間にエチプト烟草が紫烟を出す。殊にダイヤの輝きは人の網膜を刺す。それに隣つた、乗馬靴の大尉は軍刀の櫛の上に手の甲を重ねて其上に角のどれた顎を休めてゐる。その目はKの帽章から滑つて、T子の額に落ちた。Kの右手に一間おいて、若紳士が外國語の月刊雜誌を讀んでゐる。ズツと向では、小さい丸鬚がソフトと、せはしさうに話してゐる。嫁の噂でもしてゐるのらしい。澤山な人の中でも、別に際立つて目立つ人はない。そして申し合したように皆が口をつぐんでゐる。殊に婦人の客が鮮い。従つて一室の好奇心の霞はいつしかK達二人の周圍にボンヤリ渦を畫いてゐる、恰も月に月の傘がある様に。Kは、自分の身なりに氣がついた時、夫れは尤もだと思つた。彼は普段の儘である。裕の伊勢崎に鶯茶に近い色のものを羽織つてゐる。足は如何だと思れば焼杉の組下駄、素足。皺くちやの袴、汗と埃とにまみれた學校の制帽。而かもその態度は傲慢に近い。こんな男がT子といふ若い女と同伴してゐるんだ。時の歩みにつれてその霞は次第に濃くなつて、紫や黄やの凝固物さへ生ずるようになつた。KはT子との話の途切れに、その

凝固物には、嫉妬や憧憬や反抗がある事を直覺した。Kは必然的に大尉の胸を推察した。——あの學生は甚だ不都合だ、女なぞつれて。一体女は誰だらう、妹か。いや違ふ。色か、さうかもしれない。然し男の何臆せぬ態度とは矛盾する。要するに解らない、少し變は變だが。——Kはフ、ンと心に笑つて、もふ一度あたりを見た。すると急いで目を他所にそらす人もあつた。Kは頭を垂れた、そしてかう考へた。——此の部屋の電燈が全く消わたら如何だらう。そしてT子一人を残して、背伸びするのも億劫な程退屈してゐるあの男達を一人宛言ひ寄せたら如何だらう。あの色黒な大尉だつて小鳥の様な優しい態度に變るに違ひない。そして言ふだらう、『僕は何とも申しません、又申す事も出来ないのです。然し、お嬢さん、僕の身内に鳴り鳴り鳴り亘る生命の響がありますよ。それを聴いて下さいませ、いゝね、是が非でも聴いて戴かねばなりません。ね、T子さん、まあ何と美しいその笑だらう。僕はその笑さへ見れば、その笑さへわが物とすれば、この軍職も名譽も財産も自由も何もかも擲つてしまひます。僕が是まで守つて來た童貞も、地上に唯あなたといふ者があつた爲ばかりです。實に今日の邂逅は奇蹟だ。あゝ僕は僕は嚴めしかるべき武士の癖に涙がこんなに湧きかへります。T子さん、貴女は僕の生命だ。』——Kの空想は空想を重ねる。若紳士が言ふ。——『ほんとに私は駄目でした。私の過去は半獸的な生活でした。さうだ文字通りに半獸的、之が總てを言ひ盡してゐます。會社からは解職になるなり、養子先は潰すなり、自分で自分をもてあまし、戀妻はその爲めかヒステリーで狂死しました。私もこの時ばかりは目が醒めました。今は住友で使つてくれるので身命を賭して働いてゐるのです。然し私は機械ではありませんでした。私のように頑な者は人一倍心の潤ひが大切でした、機械でさへ油が入用ですもの。だから私は、この一年といふものは何物かを渴望してゐたのです。

それにござうせう。私はこの汽車で愛の權化を見出したのです。あゝT子さん、貴方の愛くるしい瞳から出る愛の流は私の空虚の總てを満たします。貴方の額に照る愛の光は私の悪業の總てを淨化します。紅椿べにばらのようなその唇、私に一度吸はして下さい。それで私は救はれるのです。適當な理性と感情との眞人間まじんげんになれるのです。』男はしゃくりながら女の足元に蹣跚よろめく。女は『滅相めつさうな、滅相めつさうな。』とて泣崩れる。其處に嚴かに宣教師が這入つて来る。男はわびしれて立上る。その顔には失望と憤怒と驚愕との暗雲が往來する。『待つて下さい日本紳士よ。』T子は面も上げ得ない。大理石の様に固まつた男は奥齒が合はない程震へる。『天の父が夫れを許したのでありますか。天帝が一切を支配してゐます。私達牧人はその父なり天帝なりの聖意を体して小羊を飼ふ者でありますぞ。お、狼よ。お前はこれいどけない小羊の背に毒々しい爪と牙とを立てやうとするのか。禁斷の實を以て誘はうとするのか。行け、狼。只では濟まないぞ。』ドシン／＼大きな足音。『コラ、ジョンブル退け、青二才退け。』炭坑主が金の唐草模様ある黒檀のステッキを振廻はす。二人は二つの口を尖らしていさかつた。炭坑主は之が耐へられなかつた。怒の火に燃わて盲滅法に二人を叩きのめした。急所をやられたか紳士はゴボツと吐血した。その血はT子のなだらかな膝を染めて足袋に傳つた。宣教師は汚くも天を罵り捨詞すてしごはを殘して逃げた。二人の影が戸の外に消ると同時に男は体格に似はしからぬ鋭い聲でカラ／＼と高笑した。次の瞬間、男の手はT子の二の腕を掴んだ。四斗樽のような胸は萩の枝みたような女の胸にのしかゝる。女は『アレー兄さん。』と叫ぶ。Kは我を忘れてT子の方に振向く。こゝでKの幻想は全く消わる。女は穩かに『神經病時代』を讀んでゐる。Kはホツとした。然し少し蒼ざめて見わる。

「アラどこか悪かない事？」

Kはどてつもない空想にわが主觀の總てをぶち込んでゐた憐れな心態を恥ぢた。

「いやさ、眠いんだ。」彼は都合よくもこんな言葉を見出した。

「昨夜遅かつたしね、吃度さうなのよ。」

「空氣枕ない？」

「まあ忘れてよ。」

Kが氣がつくと、室はガツサリ、すいてゐる。軍人も宣教師も炭坑主も見ぬない。若紳士だけが向側に長くなつてゐる。Kはもしやとそこいらに血を探した。

「僕も横になるよTちゃん。」

「だつて今まで寢てやせんのか？」

Kは答へず、右の腕を枉げて枕しようとする。T子は氣をきかして包を頭の下に置く。

「何、これ？コチン／＼する。」KはT子の顔を仰ぐ。

「ホ、瓶よ。」

「何の？」

「何のでもないわ。瓶よお化粧の。」

「白粉瓶は枕にや御免だ。取つておくれよ痛いぢやないか。」

「嫌よそんなに仰山に言つちや。ホラ、人が見てなさるわ。」

「僕、キヤラメル持つてたのに。」Kは袂を索つて黄色い箱を二つ出す。「寂しいぢやないか、食べやう、そし

でしやべらう。」

「直ぐ寝つちまう癖にね、兄さんは。」

「そんなら起きやう。」

「いゝわいゝわ、お眠いのにいゝわ。」

それからKの従兄妹たちの話になつてそれからT子の弟妹の噂に轉じた。

「Tちゃんもお休み、寝込んだつて八代迄だ。」

「乗越しちや大變だわ、私氣にかゝるの、それでもふ幾つステーションあつて？」

「ステーションかい。旅行案内見て御覽。植木とか木葉とか夜店の様な名の奴もあるから。」

「夜店つて？」

「何、駄洒落のつもりだよ。」

Kは餘程疲れたと見えて。女が「何か飲物買ひませうか。」と言つた時には微かなしかも正調な駭さへしてゐた。T子は氣が沈んで行つた。こんな時には定つて回顧的になつた。——さう。恰度昨日のこの時刻だつたわ。私はお針に疲れてお茶を戴いてゐました。その時、先日着いた兄さんからの手紙、二度目の山鹿の温泉だより、どんなに面白く讀んだでせうそして幾度も繰返し繰返し。『僕が之を書いてる前の庭を眼鏡など掛けたハイカラな女中が掃除をしてゐる。之がローレライのお得意な女なんだ。』『朝寝ん坊して牡丹の開くのを見損つちやつた。』『此處の温泉は肌を美しくするんださうな。さういへば町の人は肌細で色白だ。僕も松の湯に入つたんだが、夫を聞くと何だか怖氣おどけがついて十分もたぬ中サツサと上つて來た。鐵瓶がむきたての卵

のような顔になつてTちゃん達から見それでもされたら一大事だと思つてさ。』こんな風な文字で幾枚ものレターペーパーが一杯にされてゐたの。私、心から笑つたの。すると『何やらおもしろさうね。』とおばあちゃんと言ふんだもの。私おばあちゃんに讀んであげたわ。すると、『さうかい。さうかい』つて晴々しく笑つてくれたの。嬉しかつたわ私。それに如何でせう。妹や弟達が『兄さん兄さん』と、はしやいでる聲がするんでせう。私ギョツとしてゐると婢やが『K様がいらつしやいました。』といふんですもの、びつくり所ぢやないんだわ。私はオロ／＼して表にも出ず挨拶にも出ずにそこら中道つてゐたの。實は私悪かつたわ、あんなにお約束もし、手紙も戴き、二通の電報さへ來てるのに。然し、お父さんに願つて兄さんどこに行かうか行くまいかとしてゐる中に、氣短かの兄さんはサツサと來るんだもの。診察室に隣つた八疊で兄さんの聲がする。『僕は少し風邪ですが二度の電報にも返事がありませんから何か事があるんぢやなからうかと思つて御伺ひしたんです。』馬鹿な。熊本の遠い所からわざわざ來る必要が何處いある。『これだけ聞いた私、看護婦や患者の人達が聽いてゐるのにとハラ／＼したわ。一本調子の二人だもんだから眞箇困つちまうのよ。』では解りました、失禮さして載きます。』とか何とか言ひ棄て、兄さん立ちました。私たまらなくなつて「兄さん。」と飛び出たでせう。『今から出てこい泊りますか。』と言ふ私に耳も貸さないで「一寸おいで。』と私の背を押す様にして門の外に出たわ。闇の中に黙つて立つてるかと思ふと、「如何したんだ。』と私の腹までしむような聲を出すの。「オイ僕を貫一にするんかい。』と言つてそれから悲しくなる程責めるんだもの。かうして段々海岸に出てしまつたわ。家では心配だと思ひて母ちゃん達がお迎に來るんだもの。やつと皆で兄さんをあやまらずかして家に連れて歸つたわ。T子がこゝまで回想の糸を繰つて來ると汽車は恰度大牟田の驛に這入つた。

ドヤ／＼四五人の酔漢よひんがなだれ込む。T子は三等客の闖入者ぢやないかしらと、少女の好奇心と軽い驚きとで振向いた。「オヤツ」と一人がつぶやいた。T子は不意なたしなみのないじやれ言に一種不快な感動を受けた。見れば揃つて四十乃至五十位の男だ。棒槌の秩父の上に伊達巻の人もある。縹子の足袋に錆色羽織の人もある。ハンチングに羅紗の前垂、九曜正宗の五合瓶を蚯蚓の様に血管が飛び出した手で放さじと掴んでる人もある。T子はこの近くの商人だと知つた。

「あつち行けよ。あつちすいてらあ。」と正宗が言ふ。

「あゝ此處がいゝ、こゝがいゝ。」

皆塊つて席をとる。伊達巻がニヤ／＼T子を覗き込む。

「ハツハツハア。」

彼女は泣きたい氣になつて眠つてゐるKの肩に手を觸れる。彼等は背を叩きあつたりくすぐつたりして騒いでゐる。一人の男が頓狂な聲を出す。

「正宗呼べ、呼べ。一本で足りるものか。」

殆んど同時に他の二人が「正宗持つて来い。オーイ正宗。」とほけるない、こつちだ正宗。」と呼ぶ。

「オイ正宗ないのか。それなら何あるんだ。」

「ビールがあります。」

「ビールは何だ？」

「櫻です。」

「ビールの詮議はしなくていいぢやないか。買ふなら買ふようにさつさとしろよ。」と内から怒鳴る。

「櫻か、チツ。麥湯か。櫻はな、麥湯に酒石酸とアルコールとをブツ込んだんだせ。」と伊達巻が後を振向く。

「あゝよし三本だよ、三本だ。」と他が言ふ。

「オイ待て。おれに蜜柑だ。」

「山下。蜜柑はよせ、バナ、があるが。」

「黙つてゐろ。」山下は財布を搔廻はしてゐる。

「オイ君早くしろよ、汽車は動いてるぞ。」

「松永。今日は……酔つた盛に酔つた。」

「何だ。これ位で酔つてご、ごうなるんだ。弱虫だな。」かく言ふ松永も呂律がまはらない。

「ハ、ハ、おれはな、ハ、ハ、……玉龍にまゐつたんだ。あいつ……。」

「また倉部のおのろけか。」

「貴様のように鼻下の長過ぎるのも困つたもんだコラッ。」

彼の太腿はしびれる程きつく叩かれた。それでも平氣である。「山下手荒い事をせずさ、一寸聞けよ。長唄ならだ、常盤津ならだ。玉龍は玉龍は、ウン可愛い奴。」

隅の方で「わたしの國さ」を唸つてるのがある。涎に五日市の襟を濡らす男もある。I子はこの間なるべく

彼等の注意を牽かぬ様に、又騒動に醒されたKの不快な顔を見ないように祈つてゐた。そして小説に目を落してゐた——讀むのではなく、活字を一字一字拾つてゐるばかりだが。やがて如何した機會きかひかに、彼女のグリンブスは襦子の足袋の男の胸に亡つた。男の衝動は直ちに動いた。

「ちよいとお嬢さん。一献どうで御座んせう。杯はハ、ハ、立派な蜜柑の皮ですが……時にとつての風流で、マア一杯。」

男は赤い手を突き出した。黒縮緬の襦袢の袖が二の腕の所にたぐれた。T子は眞紅になつた。彼女はこんな時に未だ「怒」といふ事を知らなかつた。只遺瀨ない氣でイ、ラ、した。他の一人が食ひかけのバナナを床に落しながら「山下、馬鹿をするな、お可愛想に。」とさへぎつた。

「おや、こいつあ、タント同情があるぞ。」山下はまだ手を伸べた儘である。ハンチングが言ふ。

「よせつてば、伴たづなは五高の荒くれだぜ。」

「ハハハ。誰でも構まうものか、馳走しようといふんだもの。」

先の男が黒縮緬を引つぱる。山下の手は磁石に吸はれた如く、だらしなく下りた。

「チエツ！ 飲むぞ、飲むぞ、さあおれにくめ。」

「よしもう。……夜櫻はあるし。」

「花は見頃だ、八分通りの開き加減ときてゐる。」

「ハツハツハハ。ハツハツハラア。アツハツハ。」

T子はくやしき恥しさに唇を噛んだ。はやくこの人達が酔ひ潰れるなり下車するなりすればいゝのに、もし

かはKが起きてくれたらいいのにと一とすちの女心は亂れないではゐなかつた。漸くにしてKは醒めた。息をグンと吸つて無造作に腕を組んだ時、彼女の目にはたのもしい限りであつた。商人達は談の腰を折られてアルコールに脂ぎつた頬や、蒼すんだ頬や。火の様な赤顔をして、Kを見た。Kは之が爲めに別に悪感情で起さなかつた。

「Tちゃん。まだ寝ないのかい。目をつぶつてるだけでも餘程疲れが休まるよ。」

「兄さん大變なの、先刻から眠れる段ぢやないわよ。」と言ひたかつた彼女は何とも言はずに笑顔で答へた。そして彼等の視線の焦點になつてゐる事を認めた時彼の頬は艶々しく紅潮した。Kは時計を見た。そうして言つた。

「あゝもふぢきだ。十五分。」

「あらさう。嬉しい。」女の言葉は半ば口の中にあつた。

× × × × × × × ×

猫の腹毛の様な糠雨の中を二つの幌は走つた。後い爲、町家は大抵戸が立つてゐた。洗濯屋は格子の中にホワイトシャツに鍔を當てゝゐた。煮賣り屋ではまだ人聲がしてゐた。殊に水菓子屋の店だけは外光的に人の感應を鋭くさせた。甘い柔い、何だか淡く酔を催すような果實の芳香は荒んだいらだつた野獸の心さへ自然的に緩和するであらうと思はれた。人通りは殆んど絶えてゐた、だから俥の喇叭は餘り用がなかつた。Kが俥夫と二言三言會話したのみで、それから先は沈黙と闇とばかりであつた。T子は坂を上つたり下つたり、橋を過つたり、角を曲つたり、線路を横切つたりする俥の中から、四角な小さいしかも雨に曇つたセルロイ

ドを通して、土地の見當が全くつかなくなつた。東へ行くのか西へ行くのか夫れさへ不確かでおぼつかなくなつた。彼女は始終男に追ひすがる心で居た。

街樹が小枝を震ふのさへ人目を憚つて、忍び戀の若者の様に暗い中に佇んでゐる。瓦斯燈は、ともすれば消えんばかりに居眠つてゐる。人間の家の燈は隙から漏れるのでも、旅の人には、常には稀な一種の慰安と憧憬の情緒をそゝつた。その地に馴れた人にも晝が夜となり、明が暗に代はると電信が急に氣になつたり、家並や屋根の不整調が目立つたり、普段印象のないものが反つて意識の對象となり易い。小一里も來たらうと思はれる時俵は町から畑の中にそれた。それと同時にザーツといふ、川の堰を溢れる水の音を耳にした。前の俵から「あれが白河だよ。」とも何とも聲はなかつた。T子の胸は信賴と不安との間を往來した。然し環境を想像する間もなく窓の多い家が俵の前に塞つた。すると直ぐ「やあ、着いた。」とKは俵を下りた。案の定、下宿は容易に起きてくれなかつた。若い方の俵夫はくゞり戸を破れる程叩いた。主人が例の寝ぼけ聲で棧を落して戸を開くとKの背後に派手な衣裳が立つてゐるのに驚いた。「お歸りましたなあ。今日はごうだろかと思ふとりました。」

「おそくなして濟みません。」

Kが敷居をまたぐと主人は無様に「お伴はお妹さんですか。」と問うた。Kは一方に生温い返事をしながら、外に躊躇するT子を呼入れた。それから蒲團を主人に頼んで男は二階に登つた。光の消れた眞黒な中を彼女はおちけながら手索りがちについて行つた。

「之が僕の部屋なんだ。」

電燈のスイッチを拗りつゝ、Kは言つた。夫れは型ばかりながら一間の床の著いた六疊であつた。この床に接して据ゑた艶のいゝ机には、二日分の「大阪朝日」と一枚の端書とが乗つてゐた。ウンザリした氣の外に、微かな種々の感情がうごめいてゐた、二人は言葉なく眼ばかり働かしてゐた。お神がお茶を入れてくれた。いゝ茶ではなかつた。二人はまだ黙つてゐた。書棚の置時計も針を休めて黙つてゐた。T子は大小雑多の書籍の背の金文字を讀まうとしたが皆自分の經驗とは縁遠い文字ばかりが列んでゐた。下から夜具を貸してくれた。

「お渡れで御座いましたる。」

彼女は二人の對照をおもしろい事に思ひながら「床のべまつせう。」と這入り込んだ。Kは之を辭した。お神は「こと二言熊本辯の重つたるい御世辭を殘して梯子を下りた。T子はおかしさを抑へてゐた。「何言つたか解る？」と問はれると彼女は先づ笑つた。笑ふと、口をさく物憂さがケ、ロリ、と消れて急に goal な態度に變つた。

「そりや凡その事わかつてよ。だけどおかしい、變な調子。」彼女は晴々しい容子を見せた。

「いゝ調子ぢやないか、心の聲のその儘の調子だ。」

「オヤ何だかむづかしくなつて來るわ。」

一方が無邪氣にはづんでくる時Kは之と逆に、次第に燻んで行つた。Kは之を氣拙く思つた。

「寝るから其處おめ……カーテンもだよ。」

「ホ、いゝカーテンだ事ね、天竺木綿ぢやないの可愛想に。」窓下のT子は立つて空を仰ぐ。

「明日は晴れつこないわ。」半ば獨語である。

「どれ。」男はその方に歩み寄つた。

工子は華奢な兩方の腕を窓の敷居に持たせながら幾分猫背になつた。

「ねね兄さん。さう思はない？」

掬はれた様に薄化粧の顎を心持もたげてかう言はれた時、Kはグツと喉がつまつた。「お、可愛い。」彼の心臓は叫んだ。男は盲目的にグ、トツと吸ひつけられた。彼は女の圓い肩に手をあてがつて續けさまに女の名を呼んだ。女は驚いた。何やら思ひ當ると眞紅になつた。男は女の手を採つてゐた。二人は黙つてゐた。二人の胸は泣笑ひをしてゐた。男の血といふ血は踊つた、渦巻いた。之より先一步も進めない彼は、自我の弱さにぢだんだ踏んだ。急に不思議な壓迫がKを睨みつけた。Kは我に返つた。そして靜かに相手の手を放した。暫し時は移つた。Kは「熊本の街路は雨の日は駄目だ。歩けしない。」とてれかくしを試みた。

「さう？」この調子もしつくり男の言葉に適應しなかつた。けれどもこんなに軽く受け答をする事は女性の先天的能力であると思はれた。たつたこれだけの會話が餘程二人の心を平生にもどした。少くとも左様に見せかけた。

「家はどつちの方？」

男はまだ心の平靜を損み得ずにオデ／＼してゐる時、女はこんな事言つた。Kは彼女のうぶ／＼しさに、自分の心の醜さを恥ぢた。

「かうだよ。」遅れながらも彼は闇の中を指した。「こんな様な方角だ。ほら、そこに畑の先に土蔵が見ぬよう

？見ないかな。」

「どこに？」T子は輪櫛の頃の少女の様に眉をひそめる。「見はせんわ。」

「何しろこの方向だ。」

彼女は大きくうなづいて見せた。

「兄さん。今日の事、兄さん家では夢にも御存知ないのね。」

「フム。」

「怒られない事？あとで知れたら。」

T子はかう言つて微笑んだ。彼は笑つた、すべての顧慮を振棄てるべく笑つた。女もつりこまれて笑つた。

「さあ、寝やう。」

「わたし眠らなくてもいい、氣がするの、そして話したいのよ。」T子はこんな事言つた。意味あつて言ふのが無邪氣で言ふのかと、Kは女の顔を見守つた。こゝで又二人は蒲團の敷き方に迷つた。部屋の真中に蒲團を積んだなりに、二人は言葉なく立つてゐた。男性は反つてこんな事に決斷が鈍つた。

「わたし此處よ。」

彼女は西側の壁に擦りすりに床をのべた。Kは之と反對に、入口の障子の際にのべた。その間一間の隔りがあつた。Kは立つて、牡丹模様のメリンスの大巾座蒲團をそこに一枚埋めた。そしてT子のために敷布を出してから、自分はサツサと床にもぐり込んでしまつた。

T子は流石に男に衣裳を脱ぐのを見られるのが苦しかつた。彼女は羽織の紐の金金具をはづし、帶留をはづ

し、帯上げを取り、太鼓に上げた帯を解き、その下の博多帯を解き、腰上げを除き、著物を脱いで長襦袢になる、そこに又伊達巻を巻き立てる。そして帯や著物の皺を伸べ、畳んで床に就くまでには、復、時間を費した。

「お休みなさいまし。」と彼女が微かに囁いて古代模様の蒲團を被らうとする時、男の瞳は衝動的に鋭く動いた。間もなく、顔まで蒲團を被つて大きな息づかひをしてゐたKが「眠られないから。」とて電燈のスイッチを廻した時、彼女はおびれたように「嫌いやよう。」と叫んだ。けれども部屋は、空のあかりで全然暗がりではなかつた。T子は直ぐに眠つたらしい。一口も言はないし、身動きしたり、指先で頭を搔いたりする氣配もない。それに引換へてKは寝つかれなかつた。もふすぐ階下の時計が一時を告ぐる事を豫覺すると一層目が冴えて來た。彼は眠を促す二三の方法を試みた。夫に比例して意識が瞭はきりになつた。彼はT子の緋縮緬の長襦袢を思ひ起した。その下には無地の襦袢があらう。その中にこそ天鵝絨ビロウドの肌があの可隣なハットを包んでゐやう。Kは紅潮した。体が自制を越えて大きく震へた。奇妙に呼吸は逼つた。彼は幾つもの溜息を殺してゐたら肺臓が莖蕪玉こんやくたまのように固まつた。彼はもふ口を開いて喘いでゐた。吸つた息は氣管支まで達しない、出した息は鼻のあたりに溜つてゐる。彼は盜むように女の方を見据ゐた。「さうだ、今だ。」と幾度衝動がKをおだてたであらう。「あの頸を。お前は抱かないのか、線の美しいあの頸を。」幾度本能はKにたきつけたであらう。男は熱にうかされさうであつた。彼は、たねかねたまりかねて狂奔せんとする馬を、あまた、びさいなんだ。かうして一時も過ぎた、二時も過ぎた。けれどもKの胸底には何やら動かない潜在力があつた。彼は夫れに救はれた。そして夢は多いながら、比較的安らかな眠を取る事が出來た。(一九一九四)

唯時と處さを聞じうたさいふばかりで、私の拙い時折の創作が諸君の一讀を得たさいふ事は、私個人として、感謝の言葉が見出せない程嬉しう存じます。殊に高木先生の指導下さつた事は、私の到底忘れる事の出来ない心のかたみで御座います。

(一九一九、五)

【戯曲】煉獄の鐘 (一幕物)

獨法三年 脇 鐵 一

時 現代大正八年五月、或日曜日午后

所 東京郊外の淋しき町

人物 爲藏(靴工) 年三十六七歳

みさを(爲藏の先妻の子) 年九歳

吉田(町長) 年五十歳位

おはつ(爲藏の後妻) 年二十五六歳

桂一(某富豪の子) 年九歳

竹野要六(役場書記) 年二十四歳

舞臺前面向還の心 其の奥右手三分の二は貧弱な平屋、二間より成り左方の一間は平土間 爲藏の職場。三十六七には盡きたと思はれる顔して仕事着を纏ひ靴修繕その後方壁には古びた汽車の時間表、右方一間はこれも古疊み上手寄に當つて紺腰廉あり往來に面して帳場机一個、後方には見苦しい硝子戸糊あり中に靴若干列べり。その横に鏡臺一個 正面より稍左方職場入口の少し左方に當つて桐の木一本 これのみは氣持の良い縁の葉を支へて居る、左手後方には菜種の畑を越みてセツシヨンの可成り立派な教會らしきもの見ゆ。要するに可なり田舎ではあるがそれでも東京に近いらしい町の貧弱な靴屋の心。竹野職場と店との間の上り框に腰を下して巻煙草を吹かしてゐる